

水馬（ミズスマシ）とびくたびれて流れけり

富田 惣七*

これは好笑という俳人の句です。

ミズスマシつまりアメンボは、本当はとびくたびれて流れはしません。あるときは、水の流れのままに流されますが、それは溺れているのではなくて、体も足も完全に水の上に浮いていて、すました顔で流れに体をまかせているのです。

そして、自分が行きたい所まで流されると、さっと身軽く好みの場所へ水面をすべって行きます。

この身軽で迅速な行動はすばらしいものです。好笑はたぶん、人生にくたびれた人間に凝りて、こんな身軽いさすがの水馬も、というように転描したわけでしょう。

ところで或る本でみましたら、オオアメンボでもその体重は約2ミリグラムほどで、一粒のゴマよりもちょっと軽いくらいだとありました。恐ろしく軽いものです。しかしいくら軽いと言っても目方はあるわけですから、放っておけば当然沈むわけです。

それが何故沈まないでいられるか、という事もその本に書いてありました。

専門の人は、そんなこと分ってます、というところでしょうが、まあ一応話の順序なので、それを書いておきます。

簡単に言えばそれは、表面張力という物理現象の問題であって、彼の足の下の水面がへこんで見えるのは、彼の足先に細かい毛が生えていて、その毛の間に空気の泡がたくさん入っている。その上さらに毛の間から油が出て、それで水をはじく仕掛けになっている。

更にもう一つ注目すべきことは、昆虫が一般にもっている足の先の鋭い爪が、彼の場合前に向かないで、少し内側のさがったところから出ていて、足を動かしても、爪で水の表面を破らないようになっている。だからあしもとの水面がへこんでも水面を破らず、従って沈まない、という事があります。

あまりに上手に出来上っているので、思わずへーっと驚くところですが、しかしよく考えてみると、この様なアメンボの形態の神秘は、あるいは大変一般的なことではないでしょうか。

生物がその棲息する周辺に自分を適応させていく、その見事で適確なやり方は、何時でも私たちをびっくりさせます。

時速200キロのアマツバメが、コドモに餌を与えるのも、交尾をするのも、ときには眠るのさへ飛びながらというその飛行ぶり。速く飛ぶので翼が体の割にずっと長くなって、そのため地上から舞い上れず、高い絶壁に巣をつくり、そこをすみかとしている。足は歩くためにあるのではなく、崖にしがみついたためにある。だから弱小である。そのかわり渡りは日中平気でやる。タカ

* 福井市照手1-2-9

類がきても平気でいられるスピードをもっているからである。

私は何時ものことながら、こういう偉大な自然の仕組みにびっくりし、そのびっくりする事を一つの生き甲斐にしています。

そしてこのびっくりの向う側に、学問ではどうする事もできない、ふしぎなひろがりを感じるのです。

博物館の館長室にかけてある天文の世界的な権威者で福井市出身の藤田良雄氏の色紙にも“神秘”という字がかかれています。